

医療事故調停申立書(患者側)

札幌弁護士会紛争解決センター 御中

年 (札紛)第 号 (医第 号)

申立年月日 令和元年12月10日	
申立人	住所(〒060-××××) 札幌市〇〇区×条△丁目〇× 氏名 札弁 花子 印 TEL (011) 〇〇〇-×××× 職業 主婦 年齢 70歳 申立人と医療事故の患者との関係(□にレ点でご記入下さい) <input checked="" type="checkbox"/> 患者本人 <input type="checkbox"/> 患者の親族・法定相続人 *申立人が複数いる場合には、別紙をご利用下さい。
	【死亡事故の場合】 亡くなられた方のお名前： 生 年 月 日： 亡くなられた日： 最後の住所地：
代理人	住所 〒 氏名 TEL () -
相手方	(医療機関名) 住所 〒060-××××) 札幌市△区〇条×丁目△〇× 氏名(法人名・代表者名) 医療法人〇〇病院 代表者理事長 北海 太郎 TEL (011) ×××-〇〇〇〇
	(医師名・診療科目) 医師 P2 診療科目△科
	(看護師名・診療科目) 看護師 P3 診療科目△科
	(相手方との事前交渉がある場合には、事務担当者の氏名) 事務担当者 ○×△ *相手方とする医師・看護師が複数いる場合には、別紙をご利用下さい。
添付書類	<input checked="" type="checkbox"/> 紹介状 <input type="checkbox"/> 資格証明書 <input type="checkbox"/> 委任状 <input type="checkbox"/> 患者・全法定相続人の戸籍・除籍謄本等(患者死亡の場合) <input type="checkbox"/> 証拠書類 通

1. 申立ての趣旨（相手方に求める結論）

相手方に〔（金 〇〇〇万 ）円 相当額〕の支払を求める。

その他

2. 事故発生年月日

令和元年9月17日

3. 問題となる医療行為(担当した医師名・看護師名・診療科目を明記して下さい)

相手方病院の医師には、平成30年の検査の際に本件ポリープにつき切除若しくは生検をし、又は慎重な経過観察をすべき注意義務があったにもかかわらず、相手方病院の医師はそれを怠り、令和元年の時点で人工肛門造設を余儀なくされる程度に大腸がんが進行してしまった。

7. 紛争の概要

(申立人が主張する医療事故の概要を時間の流れに沿って、簡潔・明瞭に記載して下さい。なお、この申立書は相手方にも写しを送付することにご留意下さい。)

年月日	事 実
H19.5	申立人は、平成19年頃から相手方病院に通院していたが、同年5月6日、相手方病院で肺結核と診断され、同月下旬～同年10月16日、A病院に入院した。
	申立人は、同病院に入院中、大腸内視鏡検査を受け、ポリープ切除の施術を受けた。
	申立人は、同月から相手方病院への通院を再開し、平成28年5月まで、概ね月一回以上、相手方病院を受診した。
H29.6	申立人は、平成29年6月20日、便潜血があったことから、相手方病院で注腸造影検査を受け、回腸（小腸）末端まで造影したが明らかな異常所見はなさそうであると診断された。
H30.5	申立人は、平成30年5月12日、相手方病院で、担当医であるP1医師から依頼を受けたP2医師により、大腸内視鏡検査を受けた。P2医師は、直腸において、従前実施されたポリープ切除の癒痕とその傍らのポリープ（以下「本件ポリープ」という。）を認め、これらを写真撮影した上、三年後位のフォローアップでよいと考える旨診断した。P1医師は、上記検査後、申立人に対し、上記同様の説明をした。
R1.6	申立人は、令和元年6月12日、相手方病院で、P2医師により、大腸内視鏡検査を受けた。P2医師は、直腸の肛門直上において、腫瘍を認めた。その生検の結果、高分化型腺がんであると診断された。
R1.9	申立人は、令和元年9月8日、B病院に入院し、同月17日腹腔鏡下直腸切断手術を受け、人工肛門を造設された。

